

## キーワードから見る社会福祉学部学生の英語学習意識と教育効果

福 本 陽 介

名古屋産業大学 環境情報ビジネス学部

日本福祉大学 非常勤講師

### An Observation through Keywords on the Students' Motivations for Learning English and the Educational Effects of a Practical Approach to English Conversation: A Case Study of the Students of the Faculty of Social Welfare

Yosuke FUKUMOTO

Faculty of Environment and Information Management, Nagoya Sangyo University

Part-time Lecturer, Nihon Fukushi University

Keywords : コミュニケーション, 英語への関心, 友人関係, 楽しさ, 向上心

#### Abstract

The students in my classes have lessons in practical English conversation. I have investigated their motivations for learning English and their communication competence for four years (2012-2015). The questionnaires that the students answered have proved that their interests in English conversation and communication with classmates had been developed within three months from starting the course. What is worth noting is that the same result has been observed through these four years, suggesting that the students of the Faculty of Social Welfare from different years may have the similar characteristics. This paper reveals it, abstracting some keywords from their free descriptions in the questionnaires, and argues that the class management may have positive effects on students' development, taking into account their characteristics.

#### 1. はじめに

日本政府は2012年3月30日に閣議決定された「観光立国推進基本計画」の中で、訪日外国人旅行者数を2016年度までに1800万人に、2020年初めまでに2500万人にするという目標を掲げた<sup>1)</sup>。のちに政府は、2020年に4000万人、2030年に6000万人の訪日外国人旅行者数を目指すと発表した<sup>ii)</sup>。これは近年「インバウンド」

という用語で括られる旅行形態であるが、日本国内に外国人観光客が増えれば、我々日本人は日本国内にいながらも、外国語は必要ないと言ってはいられなくなることを示唆していると言えるだろう。

筆者は日本福祉大学社会福祉学部で1年生対象の必修英語科目を担当しているが、2012年度から現在まで、英会話をを用いたコミュニケーション重視型の授業を展開

している。受講生には前期の講義開始時（以下「受講前」と称す）と終了時（以下「受講後」と称す）に、英語の学習意識、コミュニケーション能力等に関するアンケート調査を毎年実施している。彼らの学習過程とアンケート調査から見えてくるのは、社会福祉学部学生は卒業後のキャリア・イメージを比較的はっきり持っている傾向があるということと、現代が国際化時代であることや英語の必要性を感じ取っているということである。

本稿では、2012年度から2015年度までの調査に基づき、社会福祉学部学生がどのような意識を持って英語学習に臨んでいるか、自身のコミュニケーション能力をどのように評価しているかを考察し、彼らの属性を想定しておく、必修英語科目も英語力・コミュニケーション能力の育成において一定の教育効果が得られると主張する。

## 2. 講義方針

筆者の授業では、より実践的な英会話体験をさせるため、ほぼ全てのクラスメイトと相当回数のペアワークをする機会を学生に与えている。ペアワークに時間を割く主たる理由は、大学入学後早期のうちに同級生との人間関係を形成させること、それによりクラスでの学習活動を活発にすること、積極的に他者にかかわるコミュニケーション能力を育成することである。福本（2013）では、このような授業形態をとることで、必修英語科目を初年次教育（特に人間関係の形成とコミュニケーション能力の開発）に有効活用できると主張した。

授業中に課しているテーマは(a)買い物 (b)鉄道の乗り方（乗り換え等）(c)自己紹介 (d)道案内 (e)電話応対を基本としているが、特定のテキストは使用していない。

筆者が一般的な教科書を使用しないのにはいくつか理由がある。まず、学生の英語学習意欲を見ると、海外に積極的に出たいと考えている学生の絶対数がさほど多くないという現実がある。（海外旅行のような短期のものを除いて。）かつて或る大学のクラス（工学系学部）で、自分は海外に行くつもりは全くないので英語は必要ないと宣言した学生がいた。そういう学生にとっては、海外留学やホームステイをテーマとした教材は興味を引かないかもしれない。（未知の世界への興味を引き出せる可能性はあるのだが。）

また、一つのテーマごとに演習時間を長めにとり、知識だけでなく身体でも英語を体感できる機会を多く設け

たいという思いもある。通年用の教科書では掲載されている項目が多く、十分な演習ができない場合がある。

最後に、これが最大の理由なのだが、日本国内にいても遭遇しうる状況に的を絞る、そういう場面に出くわした際に、学習しておいてよかったと学生に実感させたいというねらいがある。鉄道の乗り方は、実際に外国人に尋ねられる体験をする学生が毎年のように出ており、それが授業で学んだ内容の実用性を実感することに結びついているようである。（詳細は福本（2013）を参照されたい。）

筆者自身、大勢の観客の集まるイベント会場で、観客の誘導をしている警察官や駅員などの誘導員が外国人を前にして全く無力である現場に遭遇したことがある。駅の出入り口までの道案内に苦労し、長蛇の列への割り込みを禁ずることもできず、一般の日本人からそれを指摘されても対応できない様子を見ると、職務上必要な程度の英語力は備えてしかるべきではないかと感じてしまう。インバウンド観光を国家戦略として謳う現在においては、外国に行かないから英語は必要ないという理屈はあまり説得力を持たないだろう。

さて、前期に実施するのは上記の(a)-(c)だが、(a)(b)には、それぞれ3-4週間の演習期間を設け、かなりの回数のペアワークをさせたのちに、実技試験を課している。(c)の自己紹介は基本的に一定のフォーマットを与え、暗唱・スピーチさせるため、準備期間は2週間程度である。与えた以上の英語表現を用いるかどうかは学生による。丸暗記できているかどうかよりも、人前に立ち、聴衆に視線を向けながらプレゼンテーションができるかどうかを重視している。

前期を終えた時点で学生が英語学習や自身のコミュニケーション能力についてどのように感じているか、次節で検討していこう。

## 3. アンケートに基づく考察

### 3.1 質問項目

実施している調査は「コミュニケーションを重視した外国語学習についてのアンケート」と題したもので、受講前と受講後に実施し、学生の英語学習意欲やコミュニケーションの得手不得手等を調査している（福本（2013））。質問事項は以下のとおりである。質問1-5を受講前に、質問6-11（およびその理由）を受講後に回答させているが、ここでは以下の議論を進めやすくする

ため、対応する内容ごとにまとめて示しておく。

#### 英語学習意識について

【質問1】 英語を学ぶ必要性を感じていましたか。

(受講前)

1-a 感じていた。

1-b 感じなかった。

【質問6】 英語を学ぶ必要性を感じましたか。(受講後)

6-a 感じた。

6-b 感じなかった。

【質問2】 英語は好きでしたか。(受講前)

2-a 好き

2-b 嫌い

2-c どちらでもない。

【質問7】 英語が好きになりましたか。(受講後)

7-a 好き

7-b 嫌い

7-c どちらでもない。

【質問3】 英語学習に対してどのような気持ちをもっていましたか。(受講前)

3-a 学びたい。

3-b 学びたくない。

3-c どちらでもない。

【質問8】 英語学習に対して現在どのような気持ちをもっていますか。(受講後)

8-a 学ぶ意欲が増した。

8-b 学ぶ意欲が失せた。

8-c どちらでもない。

#### 他者とのコミュニケーション意識について

【質問4】 コミュニケーション全般について (受講前)

4-a 顔を合わせるコミュニケーションの方が好き。

4-b 携帯電話・メール・SNSなどのコミュニケーションの方が好き。

4-c 携帯電話・メール・SNSなどでしかコミュニケーションがとれない。

4-d どのような形態であってもコミュニケーションをとること自体好き(得意)。

4-e どのような形態であってもコミュニケーションをとること自体嫌い(苦手)。

【質問9】 コミュニケーション全般について (受講後)

9-a 顔を合わせるコミュニケーションの方が好き。

9-b 携帯電話・メール・SNSなどのコミュニケーションの方が好き。

9-c 携帯電話・メール・SNSなどでしかコミュニケーションがとれない。

9-d どのような形態であってもコミュニケーションをとること自体好き(得意)。

9-e どのような形態であってもコミュニケーションをとること自体嫌い(苦手)。

【質問5】 顔を合わせるコミュニケーションについて (受講前)

5-a 好き・得意(抵抗はない)。

5-b 嫌い・苦手(抵抗がある)。

【質問10】 顔を合わせるコミュニケーションについて (受講後)

10-a 抵抗がなくなってきた(なくなった)と思う。

10-b 抵抗が大きくなった。

10-c 以前と変わらず好き(得意)。

10-d 以前と変わらず嫌い(苦手)。

また、上記以外に、ペアワークや実技試験などを介したクラスメイトとの交流にかんして受講後に感想を書かせている。

### 3.2 調査結果

本節では、英語学習やコミュニケーション能力にかんする学生の意識を見てみよう。回答数は2012年度から2015年度までの計6クラス、合計147名(有効回答のみ)である。便宜上クラス名はA-Fとしておく。ここでは、受講前に或る選択肢を選んだ学生が受講後にどの選択肢を選んでいるかに注目し、半期間の学生の変化を見てみることにする。3.2.1節では受講前と受講後の回答の異同を表にまとめて観察し、3.2.2節では学生の学習意識を受講後アンケートの自由記述に記されたキーワードから探る。

#### 3.2.1 選択肢から見る学生の意識変化

本節では、3.1節で示した各組の質問項目ごとに、受講前・受講後アンケートの選択肢の異同を詳しく見てみよう。

3.2.1.1 英語学習の必要性の意識変化

英語を学ぶ必要性についての受講前・受講後の回答の異同を表したのが表1である。受講前に英語学習の必要性を感じていたと回答した学生105名のうち、99%が受講後も同じ選択肢を選んでいる(1a-6a)。一方、受講前に必要性を感じなかったと回答していた42名のうち81%の学生が、受講後に必要性を感じたと回答した(1b-6a)。

3.2.1.2 英語の好き・嫌いの意識変化

次に英語を好むか否か、質問2と7を対照させたものが表2である。

もともと英語が好きだったという学生のうち95.8%が受講後も好きだと回答した(2a-7a)。嫌いだったという学生のうち20.3%が好きになったと回答し(2b-7a)、65.6%が「どちらでもない」を選択していることから(2b-7c)、嫌悪感が幾分解消されていると考えられる。また、「どちらでもない」と答えていた学生のうち54.2%が好きになったと回答した(2c-7a)。変化のない学生も44.1

%と少なくはないが(2c-7c)、半数強に好意的反応が見られたことは注目してよいだろう。

3.2.1.3 英語の学習意欲の意識変化

次に英語を学習したいと思うかどうか、事前事後の回答を比較してみよう(質問3, 8)。

もともと学習意欲のあった学生のうち85.7%が更に意識が高まったと回答している(3a-8a)。質問2, 7と同様に、「学びたくない」と回答していた学生のうち、学習意欲の増した者、嫌悪感が減退したと思われる者(「どちらでもない」)がともに47.7%いることや(3b-8a, 3b-8c)、受講前に「どちらでもない」を選択した学生のうち64.8%が学習意欲が増したと回答していること(3c-8a)は、3ヶ月という短い受講期間での変化としては大きな成果と言えるだろう。

3.2.1.4 コミュニケーション手段についての意識変化

続いて、コミュニケーション全般に対する学生の意識について見てみよう。これは学生が他者とコミュニケー

表1 英語学習の必要性の意識変化【質問1, 6】

		A	B	C	D	E	F	合計	割合		
感じていた	1a-6a	21	12	17	17	19	18	104	99.0%	感じた	
	1a-6b				1			1	1.0%	感じなかった	
								105	100.0%		
感じなかった		A	B	C	D	E	F	合計			
	1b-6a	6	3	8	6	5	6	34	81.0%	感じた	
	1b-6b		5	2	1			8	19.0%	感じなかった	
								42	100.0%		
	27	20	27	25	24	24	147	100.0%			

表2 英語の嗜好性の意識変化【質問2, 7】

		A	B	C	D	E	F	合計	割合		
好き	2a-7a	10	4	2	2	3	2	23	95.8%	好き	
	2a-7b								0.0%	嫌い	
	2a-7c		1					1	4.2%	どちらでもない	
								24	100.0%		
嫌い		A	B	C	D	E	F	合計			
	2b-7a	1	2	2	4	1	3	13	20.3%	好き	
	2b-7b	1	1	3	1	2	1	9	14.1%	嫌い	
	2b-7c	6	5	7	9	7	8	42	65.6%	どちらでもない	
								64	100.0%		
どちらでもない		A	B	C	D	E	F	合計			
	2c-7a	6	2	6	4	7	7	32	54.2%	好き	
	2c-7b					1		1	1.7%	嫌い	
	2c-7c	3	5	7	5	3	3	26	44.1%	どちらでもない	
								59	100.0%		
	27	20	27	25	24	24	147	100.0%			

表3 英語学習意欲の意識変化【質問3, 8】

		A	B	C	D	E	F	合計	割合		
学びたい	3a-8a	11	4	6	6	8	7	42	85.7%	意欲増した 意欲失せた どちらでもない	
	3a-8b								0.0%		
	3a-8c	3		2		2		7	14.3%		
								49	100.0%		
学びたくない		A	B	C	D	E	F	合計			
	3b-8a	3	3	3	5	2	5	21	47.7%	意欲増した 意欲失せた どちらでもない	
	3b-8b		1			1		2 <sup>iii</sup>	4.5%		
	3b-8c	2	6	5	5	2	1	21	47.7%		
							44	100.0%			
どちらでもない		A	B	C	D	E	F	合計			
	3c-8a	5	2	8	6	5	9	35	64.8%	意欲増した 意欲失せた どちらでもない	
	3c-8b								0.0%		
	3c-8c	3	4	3	3	4	2	19	35.2%		
							54	100.0%			
		27	20	27	25	24	24	147	100.0%		

ションをとる時にどのような手段を好むか問うものである。この4年間、アンケートの回答と授業中の学生の動き方を照らし合わせてみると、人見知りを含め、顔を合わせてコミュニケーションをとることが苦手だと回答している学生は、ペアワークでの動き方が比較的受け身になる(とても積極的であるとは言えないという意味)傾向が見てとれた。どう頑張っても苦手なものは苦手だと言う学生も一定数いるが、半期の間に顔を合わせるコミュニケーションを好む学生がおしなべて増加しているとみることができる(表4)。

顔を合わせるコミュニケーションが好きだと受講前・受講後ともに回答した学生は82.5%である(4a-9a)。受講後どのようなコミュニケーション形態でもかまわないと回答した12.3%と合わせると(4a-9d)、94.8%が顔を合わせるコミュニケーションを好むとみなしてよい。

直接顔を合わせないコミュニケーションを好んでいた学生を見ると、変化のない学生が40%いるものの(4b-9b)、顔を合わせるコミュニケーションが好きだという群(36%)と、どのような形態でもかまわないという群(20%)を合わせると、過半数の学生に意識変化が起こったことが見てとれる(4b-9a, 4b-9d)。携帯電話・メール・SNSなどでしかコミュニケーションが取れないと回答した学生もいるにはいるが(147名中3名)、数は少ないものの、顔を合わせるコミュニケーションを好むように変化している(4c-9a, 4c-9d)。

受講前に「どのような形態でもかまわない」と回答していた学生の受講後の回答の主たる分布を見ると、「顔合わせ」に特化した回答が36.7%(4d-9a)、どのような

形態でもかまわないという回答が56.7%(4d-9d)と、あわせて93.4%にのぼる。4a-9a, 4a-9d, 4d-9a, 4d-9dの4つの組み合わせを見ると、自分が社会的であると自覚している学生が相当数いることがわかる。このことは社会福祉学部学生の社交性を示していると見ることができるだろう。

一方、どのような形態でも苦手であると受講前に回答していた学生を見てみると、半期間では意識変化の見られなかった学生が53.1%いるが、受講後に「顔合わせ」「どれでもOK」を選択した学生があわせて31.2%いた。多数派とは言えないが、他者とかかわることに対して積極性が増した学生が3割現れたことは、学生の成長という点から見て評価するに値する。

### 3.2.1.5 顔を合わせるコミュニケーションについての意識変化

最後に、上記の質問と重複するが、顔を合わせるコミュニケーションについてどのように感じるかに特化した質問を投じた。受講者の多くにそれを苦痛と感ずる傾向が見られるならば、講義スタイルを修正する必要もあるからである。

受講前に抵抗がないと答え、受講後もそれ以上に抵抗がなくなった、以前と変わらず抵抗がないと答えた学生をあわせると、97.7%にのぼる(5a-10a, 5a-10c)。一方、受講前に抵抗があると答えていた学生を見ると、相変わらず苦手という学生が27.1%いるが、抵抗がなくなってきたと回答した学生が71.2%いることがわかる。半期間クラスメイトと作業を通じて交流することで、苦手意識

表4 コミュニケーション手段についての意識変化【質問4, 9】

		A	B	C	D	E	F	合計	割合		
顔合わせ	4a-9a	11	4	10	6	11	5	47	82.5%	顔合わせ SNSなど SNSなどのみ どれでもOK どれでもNG	
	4a-9b			1				1	1.8%		
	4a-9c								0.0%		
	4a-9d	1		1	2	2	1	7	12.3%		
	4a-9e	1		1				2	3.5%		
								57	100.0%		
SNSなど		A	B	C	D	E	F	合計			
	4b-9a		1		4		4	9	36.0%	顔合わせ SNSなど SNSなどのみ どれでもOK どれでもNG	
	4b-9b	3	1	2	1	2	1	10	40.0%		
	4b-9c								0.0%		
	4b-9d		1		2	1	1	5	20.0%		
4b-9e						1	1	4.0%			
								25	100.0%		
SNSなどのみ		A	B	C	D	E	F	合計			
	4c-9a						1	1	33.3%	顔合わせ SNSなど SNSなどのみ どれでもOK どれでもNG	
	4c-9b								0.0%		
	4c-9c			1				1	33.3%		
	4c-9d					1		1	33.3%		
4c-9e								0.0%			
								3	100.0%		
どれでもOK		A	B	C	D	E	F	合計			
	4d-9a	1		1	2	4	3	11	36.7%	顔合わせ SNSなど SNSなどのみ どれでもOK どれでもNG	
	4d-9b			1		1		2	6.7%		
	4d-9c								0.0%		
	4d-9d	6	5	2		1	3	17	56.7%		
4d-9e								0.0%			
								30	100.0%		
どれでもNG		A	B	C	D	E	F	合計			
	4e-9a	1	2	1	5			9	28.1%	顔合わせ SNSなど SNSなどのみ どれでもOK どれでもNG	
	4e-9b		1	2	1		1	5	15.6%		
	4e-9c								0.0%		
	4e-9d		1					1	3.1%		
4e-9e	3	4	4	2	1	3	17	53.1%			
								32	100.0%		
		27	20	27	25	24	24	147	100.0%		

が或る程度払拭されたことを示していると思われる。

以上の結果から、英語を学ぶことに対する感情や対人コミュニケーションに対する学生の意識が、半期の授業の間にプラスの方向に転じている傾向があることがわかる。各クラスで極度に大きな差がないということは、この4年の間、年度を問わずほぼ一定の授業効果があることを示していると言えるだろう。社会福祉学部学生は、筆者の指示に従い、できるだけ最善を尽くしてペアワークや実技試験に臨もうとする態度を示すことも、教育効果を肯定的に測定できる大きな一因であることは指摘しておくべきだと思う。学部によって同じ授業方針で同じ効果が見られるか、あるいは全く異なる結果が出るかは、一般教養教育という観点から考察してみる価値があると

思うが、それは別の場に譲ることにしよう。

### 3.2.2 まとめ

本節では受講前アンケートでの各選択肢が受講後アンケートでどのように移行しているかに注目し、学生の英語学習に対する意欲、コミュニケーション能力にかんする自己評価を観察した。全体的に見ると、英語の必要性の実感、英語への興味関心、学習意欲の向上、また、顔を合わせた直接的なコミュニケーションへの抵抗の軽減といった特徴が見てとれた。次節では、受講後アンケートに学生が記した自由記述からいくつかのキーワードを拾い出し、学生の実像に迫ってみよう。

表5 顔を合わせるコミュニケーションについての意識変化【質問5, 10】

		A	B	C	D	E	F	合計	割合	
抵抗なし	5a-10a	9	4	8	6	7	5	39	44.3%	抵抗なくなってきた 抵抗が大きくなった 以前と変わらずなし 以前と変わらず苦手
	5a-10b								0.0%	
	5a-10c	9	5	8	7	12	6	47	53.4%	
	5a-10d		1			1		2	2.3%	
								88	100.0%	
		A	B	C	D	E	F	合計		
抵抗あり	5b-10a	6	8	5	9	4	10	42	71.2%	抵抗なくなってきた 抵抗が大きくなった 以前と変わらずなし 以前と変わらず苦手
	5b-10b								0.0%	
	5b-10c				1			1	1.7%	
	5b-10d	3	2	6	2		3	16	27.1%	
								59	100.0%	
		27	20	27	25	24	24	147	100.0%	

### 3.3 キーワードから探る学生の学習意識の変化

本節では、受講後アンケートに学生が書き込んだ自由記述から、学生が英語学習に対してどのような意識を抱いているか考察する。各質問に書かれた回答理由を内容別に集計してみると、それぞれいくつかのキーワードを拾い出せる。それを見ると、社会福祉学部学生が英語学習や他者とのコミュニケーションに対してどのような考えを抱いているか、彼らの属性の一部を知ることができる。以下、半期終了時の学生の意識を見てみよう。前節で示したとおり、各クラスに大差が見られないことから、本節ではクラス別表示はせず、回答総数のみ示して議論を進めることにする。

#### 3.3.1 質問項目別キーワード

##### 3.3.1.1 英語学習の必要性

受講前・受講後の回答数のみ単純に比較すると表6, 7のようになる。

まず受講後に英語を学ぶ必要性を感じたと回答した学生の理由を見ると(表8)、「時代の要請」「自分自身の

向上心」「教材の実用性」「外国人と英語で話した実体験」といったキーワードが目立つ。(内容上同義と解釈できるものはそれぞれのキーワードに含めるものとする。)

39%の学生が、英語は今後の生活で必要になる、就職活動する時に求められるなど、時代が国際化していることを意識していることがわかる。英語学習の動機づけを高めるとすれば、彼らの国際化意識を刺激できるような授業内容を提供することが効果的と思われるが、それは「教材の実用性」(20%)で或る程度担保してあるし、その結果が「実体験」(9%)に結びつく可能性を学生に自覚させることもできる。また、学生が向上心を持って授業に臨んでおり、現状の実力で満足するわけにはいかないと感じていることも見逃せない。これらを総合すると、学生の授業への積極的参加を促す方策として、学生の社会を見る目、実社会の中での学習成果の応用といった点を考慮し、各授業の目標設定(シラバス作成)をすることが有効であると思われる。筆者の講義では英会話をテーマにしているが、英会話の実力をさらに高めるために文法を学ぶ、視覚媒体で情報収集できるようにするために英文読解の練習をするなど、一見実用英語と関連がないと思われがちな分野の学習も、意義付けができれば講義目標を学生に明示することは可能だろう。中学・高校の英語の一般的授業形態と大学で目指す英語学習のあり方

表6 【質問1】英語を学ぶ必要性を感じていたか(受講前)

	回答数	割合
1-a 感じていた	105	71%
1-b 感じなかった	42	29%
	147	100%

表7 【質問6】英語を学ぶ必要性を感じたか(受講後)

	回答数	割合
6-a 感じた	137	93%
6-b 感じなかった	10	7%
	147	100%

表8 英語学習の必要性(キーワード別集計)

キーワード	回答数	割合
時代の要請	53	39%
向上心	34	25%
教材の実用性	27	20%
実体験	12	9%
その他	11	8%
	137	100%

が異なることは、教育機関だけでなく学生にも自覚させるべきであろう。

逆に学ぶ必要性を感じなかったと回答したのは10名(7%)であった。自由記述は8件のみで、その内訳は、「実体験がない」が4件、「必要性がわからない」が2名、「ジェスチャーでなんとかかなる」が2名であった。

### 3.3.1.2 英語が好きになったか

学習効果が高まるには、学生自身に向学心があることが理想的である。その意味で、授業を楽しんでいるかどうかが重要だと言えよう。受講前と受講後で英語が好きになったと回答した学生は表9、10にまとめたとおりである。

英語が好きになったという学生は46%いるが、その主たる理由として「クラスメイトとコミュニケーションをとるのが楽しい」という記述と「授業形態が楽しい」という記述があわせて6割を超えている。(少数派の意見については言及する必要がある場合のみ触れることとする。以下同様)。

この2つは「楽しい」というのが共通するキーワード

表9 【質問2】英語は好きだったか(受講前)

	回答数	割合
2-a 好き	24	16%
2-b 嫌い	64	44%
2-c どちらでもない	59	40%
	147	100%

表10 【質問7】英語が好きになったか(受講後)

	回答数	割合
7-a 好き	68	46%
7-b 嫌い	10	7%
7-c どちらでもない	69	47%
	147	100%

表11 英語が好きになった(キーワード別集計)

キーワード	回答数	割合
コミュニケーション楽しい	24	35%
授業楽しい	22	32%
向上心	8	12%
音楽	5	7%
元々好き	3	4%
国際化	2	3%
必要性	2	3%
その他	2	3%
	68	100%

であるが、「コミュニケーションが楽しい」というキーワードについては、クラスメイトと英会話を通じて言葉を交わせる喜びを綴った記述が多く見られる。「授業が楽しい」というキーワードについては、実際に英会話をして面白と感じた、英会話体験を授業中に重ねることで英会話に対して親しみがわいたという趣旨の記述が多い。プラクティカルな講義だけが一律によいというわけではないが、そもそも言語活動は他者とのコミュニケーションを基本としているから、(英)会話することが楽しいと学生が感じられる場を与えられたなら、この授業が学生の意識変化に一定の役割を果たしたと言ってよいだろう。

一方、英語が嫌いだと答えた回答数はわずかに9名であった。うち「嫌いなものは嫌いである」という意見が4件、「苦手意識がある」という意見が5件であった。

「どちらでもない」と回答した学生の記述(表12)には一定の傾向が強く見られたわけではないが、英語に対する興味や嫌悪感が変化するまでには至らなかった(「どちらでもない」)、英語が難しいという意識が払拭できないという記述が最多の26%ずつを占めている。その一方で、好きだとまでは言えないが、「前より楽しい」と思える学生が24%いることから、学習過程の楽しさが学生の意識変化に果たす役割は肯定してよいだろう。

### 3.3.1.3 英語学習意欲

学生の英語学習意欲はどのように変化したのだろうか。受講前・受講後の回答を比較すると、学習意欲が増した学生が過半数おり、学びたくないという学生が激減していることがわかる(表13、14)。

キーワードを分類してみると、授業が楽しかったという趣旨の意見に代表される「充実感」が27%を占めており、ここでも講義に楽しさを見出したことが学習意欲の増加を促していることが見てとれるが、もっと英語を

表12 どちらでもない(キーワード別集計)

キーワード	回答数	割合
元々好き	1	2%
前より楽しい	16	24%
どちらでもない	17	26%
難しい	17	26%
苦手意識	7	11%
嫌い	4	6%
その他	4	6%
	66	100%

表 13 【質問3】英語学習に対する気持ち (受講前)

	合計	割合
3-a 学びたい	49	33%
3-b 学びたくない	44	30%
3-c どちらでもない	54	37%
	147	100%

表 14 【質問8】英語学習に対する気持ち (受講後)

	回答数	割合
8-a 学ぶ意欲が増した	97	66%
8-b 学ぶ意欲が失せた	2	1%
8-c どちらでもない	48	33%
	147	100%

表 15 学習意欲増加 (キーワード別集計)

キーワード	回答数	割合
向上心	58	60%
充実感	26	27%
必要性	12	12%
その他	1	1%
	97	100%

話せるようになりたい、もっと学びたいという学生の向上心を刺激していたことこそ強調しておくべきである(60%)。実践的な言語活動を体験させることで彼らが自分の実力を自覚するきっかけとなるなら、その後の学習機会につながることも期待できるからである。

次に学習意欲に変化がなかった群を見ておこう(学習意欲が減退した群については注 iii を参照)。

苦手意識が払拭できないという回答が60%、これ以上勉強したいとは思わないという「現状で十分」が12%、英語を勉強する余裕がない、学ぶ必要性を感じないがともに7%と否定的回答が多いことがわかる。英語に関心がない学生の最大の理由は苦手意識にあるようだ。

全体的に英語への関心が高まった傾向が見られると3.2節で主張したが、苦手意識が凝り固まっている場合、学生の意識改革は容易ではない。一方、表16の中で、も

表 16 学習意欲に変化なし (キーワード別集計)

キーワード	回答数	割合
苦手・嫌い・気が進まない	26	60%
現状で十分	5	12%
余裕なし	3	7%
必要性を感じない	3	7%
以前同様やる気あり	2	5%
向上心	2	5%
その他	2	5%
	43	100%

ともやる気がありその気持ちが変わっていないという回答が5%、本来この選択肢を選ぶべきでないはずの「向上心」(学習意欲が高まった)という回答も5%あり、よい意味で「どちらでもない」を選択しているケースもある。

### 3.3.1.4 コミュニケーション全般

次に学生の対人コミュニケーション意識を見てみよう。受講前アンケートで対面式コミュニケーションが好きだという学生39%とあらゆるコミュニケーション形態が平気だと回答した学生20%を合わせると、ほぼ6割に達する(4-a, 4-d)(表17)。受講後アンケートでは同選択肢がそれぞれ52%と21%で、合わせて73%にのぼる(9-a, 9-d)(表18)。一方、非対面式コミュニケーションを好む群(4-b, 4-c, 9-b, 9-c)とどのような形態でもコミュニケーション自体が苦手という群(4-e, 9-e)は受講前後で大差はない。

受講後アンケートのそれぞれの選択肢について、キ

表 17 【質問4】コミュニケーション全般について (受講前)

	回答数	割合
4-a 顔を合わせるコミュニケーションの方が好き	57	39%
4-b 携帯電話・メール・SNSなどでのコミュニケーションの方が好き	25	17%
4-c 携帯電話・メール・SNSなどでしかコミュニケーションがとれない	3	2%
4-d どのような形態であってもコミュニケーションをとること自体好き(得意)	30	20%
4-e どのような形態であってもコミュニケーションをとること自体嫌い(苦手)	32	22%
	147	100%

表 18 【質問9】コミュニケーション全般について (受講後)

	回答数	割合
9-a 顔を合わせるコミュニケーションの方が好き	77	52%
9-b 携帯電話・メール・SNSなどでのコミュニケーションの方が好き	18	12%
9-c 携帯電話・メール・SNSなどでしかコミュニケーションがとれない	1	1%
9-d どのような形態であってもコミュニケーションをとること自体好き(得意)	31	21%
9-e どのような形態であってもコミュニケーションをとること自体嫌い(苦手)	20	14%
	147	100%

表19 顔を合わせるコミュニケーションが好き  
(キーワード別集計)

キーワード	回答数	割合
顔・表情・反応	59	79%
好き・楽しい <sup>iv</sup>	10	13%
好きになった	5	7%
その他	1	1%
	75	100%

表20 どんな形態でもOK (キーワード別集計)

キーワード	回答数	割合
好き・楽しい	19	70%
それぞれによしあし	3	11%
性格	3	11%
なんでもOK	2	7%
その他	2	7%
	27	100%

ワードを拾ってみよう。まず9-aの選択肢だが(表19), 「顔・表情・反応」という言葉の出現数が圧倒的に多い。顔が見え、相手の表情から反応がわかることで安心してコミュニケーションがとれるという実感を表す記述が大多数を占めている。

順序は入れ替わるが、類似した傾向の見られる9-dのキーワードを見てみよう(表20)。それぞれのコミュニケーション手段に一長一短があるという意見や(「それぞれによしあし」)、自分の性格的に平気(または苦手)というコメント(「性格」)、どんな形態でも好きだからという記述(「なんでもOK」)もあるものの、人と話すのが楽しいというキーワードを中心とした回答が7割を占めている。

逆に表21を見ると、対面式コミュニケーションを嫌う学生の大半は苦手意識を持っていることがわかる。返信内容を考慮してから送信できるからという或る意味肯定的な記述も12%あるが、そうもしてられない状況が仕事の現場ではいくらでもある。同じような傾向は表22に示した、どのような形態でもコミュニケーションが苦手であるという95%の学生にもあてはまる。また、9-cを選択した1名は人前に出るのが苦手であると記述しているが、9-b、9-c、9-eを見ると、社会福祉学部学生の場合、将来社会福祉士や施設での勤務を望む者もいることから、就職活動開始時期までには克服したい課題と言えるかもしれない。

表21 携帯・メール・SNSが好き (キーワード別集計)

キーワード	回答数	割合
苦手	13	76%
返信前に考慮可能	2	12%
その他	2	12%
	17	100%

表22 どんな形態でもNG (キーワード別集計)

キーワード	回答数	割合
苦手	18	95%
その他	1	5%
	19	100%

### 3.3.1.5 顔を合わせるコミュニケーション

最後に顔を合わせるコミュニケーションについて見てみよう。受講前・受講後の回答数をまとめたものが表23、24である。抵抗がなくなってきた群(10-a)と受講前と変わらず好きだという群(10-c)をあわせると、88%にのぼる。

表25に示したとおり、10-aの回答のキーワードは、ペアワークの回数を重ねることで楽しくなった、慣れてきたという趣旨の回答が77%と圧倒的に多い。類似したキーワードとも言えるが、言葉を交わす機会が増えたという意見も10%ある。少数ではあるが、相手の反応

表23 【質問5】顔を合わせるコミュニケーションについて (受講前)

	合計	割合
5-a 好き・得意(抵抗はない)	88	60%
5-b 嫌い・苦手(抵抗がある)	59	40%
	147	100%

表24 【質問10】顔を合わせるコミュニケーション(受講後)

	合計	割合
10-a 抵抗がなくなってきた(なくなった)と思う	81	55%
10-b 抵抗が大きくなった	0	0%
10-c 以前と変わらず好き(得意)	48	33%
10-d 以前と変わらず嫌い(苦手)	18	12%
	147	100%

表25 抵抗がなくなってきた(キーワード別集計)

キーワード	回答数	割合
楽しい・慣れた	59	77%
話す機会増加	8	10%
相手の反応分かる	6	8%
その他	4	5%
	77	100%

表 26 以前と変わらず好き (キーワード別集計)

キーワード	回答数	割合
好き・楽しい	33	73%
伝わりやすい	7	16%
慣れた	4	9%
その他	1	2%
	45	100%

表 27 以前と変わらず嫌い (キーワード別集計)

キーワード	回答数	割合
苦手	17	94%
その他	1	6%
	18	100%

が見てとれることが理由で抵抗がなくなったというコメントも8%ある。これらはいずれも対面接触のよさを学生が実感したことの現れであると言えよう。

表 26 を見ると、受講前と変わらず好きだという回答の主たるキーワードはそれが好きだからということに尽きるようである(73%)。対面式コミュニケーションだと思伝達が容易だという回答(「伝わりやすい」)は表 25 の「相手の反応が分かる」というキーワードと親和性が高い。対面式コミュニケーションのよさを感じる理由は、楽しさと伝達のしやすさを実感できることにあるようだ。人見知りの傾向を自ら認めている学生などにとっては英会話を強制することで逆に対面式コミュニケーションへの抵抗が増すのではないかと危惧していたが、抵抗が大きくなったと回答した学生が一人もいなかったことから、筆者の杞憂に終わったようである。

対面式コミュニケーションがもともと嫌い(苦手)だと受講前に回答した学生についても言及しておこう。その割合は40%から12%に減少しているが(表 24)、その12%の学生のうち94%が、嫌いな理由として「苦手だから」というキーワードを挙げていた(表 27)。ここでも苦手意識を持つ層の意識変革が容易でないことが確認できる。その他の1名はクラスメイトの顔と名前が一致しないことを理由に挙げていた。同じような意見を活動中の学生から聞くことはあるが、名前を全員覚えられないにしても、活動中の様子を見る限り、顔を見ればわかるというところまでは互いに認識できるようになっていると筆者には感じられる。

### 3.3.1.6 クラスメイトとの交流について

次にペアワークや実技試験を通じたクラスメイトとの

表 28 クラスメイトとの交流 (キーワード別集計)

キーワード	回答数	割合
友人・交流	79	54%
楽しい	36	25%
成長	19	13%
その他	27	18%
	146	100%

交流について学生がどのように感じているか、キーワードを拾ってみよう。友人が増えたというキーワードが54%を占めていることが表 28 からわかる。過半数の学生がそう感じたということは、入学後早期に人間関係を構築させるといふ筆者の目的が或る程度達成されたと見てよいだろう。次に多いのが会話することが楽しいというキーワードで25%である。続いて、自分の積極性が増した、コミュニケーションをとる練習になったなど、自身の成長を挙げる学生が18%いる。

できるだけ大勢のクラスメイトとペアワークをしようとする積極的に行動する学生が多く、交流を繰り返すことでクラスメイトと面識ができ、授業中の同じ目標を達成するために互いに協力しようという仲間意識が芽生えたと考えられる。平常の演習時には学生同士で自主的に行動することを推奨しているが、英会話実技試験を行うときは筆者が会話をするペアを指定している。ペアを組んだ学生の緊張しつつも和やかな雰囲気や、そのやりとりを暖かく見守り、各ペアの試験が終わるたびに拍手を送る学生たちを見ると、人間関係の構築が授業の活性化につながっていることは認められると思う。

### 3.3.2 まとめ

3.3 節では受講後アンケートに学生の記入したコメントの内容を分類し、学生がどのような意識を持って英語学習に臨んでいるか、対人コミュニケーションに対してどのような意識を抱いているかを見てきた。その結果、クラスメイトと友人関係が構築できたこと、英会話活動を楽しんでいるようになったこと、顔を合わせるコミュニケーションに対する抵抗がなくなった学生が多いことがわかった。

## 4. 結論

2 節で筆者の講義の目標として、大学入学後早期のうち同級生との人間関係を形成させること、それによりクラスでの学習活動を活発にすること、積極的に他者に

かかわるコミュニケーション能力を育成することの3つを挙げた。筆者のクラスではテーマを絞り込んで繰り返し英会話をさせることで、丸暗記とは違う英語学習を学生に体験させている。文法の基礎知識や語彙の不十分さが英会話活動を停滞させる可能性もあるが、筆者自身もペアワークに加わることで学生に可能な範囲のアドバイスは施している。しかし、文法の正確さよりもむしろ他者に語りかけ、他者の話を聞こうとする姿勢こそ大切であるということを学生に繰り返し伝えている。先にも触れたが、言語は他者とコミュニケーションをとるための手段の一つにすぎないからである。

英語はグローバル化が進む現代において必要な国際語であるという意見は枚挙に暇がないが、では英語で会話する相手とは誰だろうか。必ずしも英語母語話者たちであるとは限らない。世界の人口の分布から見ても、圧倒的に多いのはアジア人であろう。我々日本人を含むアジア人同士が第二言語としての英語でコミュニケーションをとる機会の方が多いかもしい。つまり、母語話者の英語とは異なる英語が飛び交うことになるわけである。その時、母語話者並の正確な文法や発音はおそらく要求されない。(鳥飼(2011)などにも似たような指摘がある。)ここでは意思疎通が可能かどうかということが究極的な目標となるわけである。その意味で、基礎英文法のドリルを繰り返すのではなく、実際に英会話をさせてみて、自分に欠けていること、さらに学ぶべきことを学生に自覚させることに筆者は重きを置いている。学習意欲が高まれば、学生が基礎英文法に戻る必要性を感じ、文法を学ぶことの大切さに気づくだろう。

本稿では社会福祉学部の学生を対象とした考察を行った。英語で自己紹介をさせた際に例年気づくことだが、1年生前期の時点で、将来社会福祉士になりたい、介護施設などで働きたいと語る学生が3割ほどはいる。彼らの望む職業はコミュニケーション能力を要する仕事の一つだが、そのように発言する学生の多くが社会的である。また、指示に従って活動しようとする傾向も強い。社会福祉学部はキャリア・イメージを持ちやすい学部の一つなので、どういう場面で英語が必要になりうるかを考え、発展的な英語科目を配置することも不可能ではないだろう。現在は様々な意味で学部のキャリア・イメージを学内外に提示することが求められているように感じるが、社会福祉学部以外の場合も学部教育イメージに基づいたカリキュラムが構築されているはずなので、それぞれの

学部生にどうして一般教養として英語が必要なのかを考えさせることはできるのではないだろうか。

#### 注

- i 国土交通省観光庁「観光庁について 観光立国推進基本計画」(2012年3月30日)
- ii 『日本経済新聞』「世界有数の観光大国になるために」(2016年4月30日)
- iii その理由として、「もう学びたくないと思うから」、「英語は文法だけではないと知れたから」という記述があった。前者からは半期の授業の間にどのような心境の変化があったのか判断することは難しい。後者は質問の意図からそれた記述と思われる。
- iv このキーワードは人と話すのが好き(楽しい)と述べているだけのもので、対面式コミュニケーションがよりよいという明確な答えにはなっていない。

#### 参考文献

- 鳥飼玖美子(2011)『国際共通語としての英語』、講談社現代新書。  
福本陽介(2013)「初年次教育として必修英語科目の果たしうる機能：コミュニケーション能力育成を視野に入れて」『日本福祉大学 全学教育センター紀要』第1号、19-38。

#### 参考資料

##### ウェブサイト

- i 国土交通省観光庁「観光庁について 観光立国推進基本計画」(2012年3月30日)  
(<http://www.mlit.go.jp/kankochu/kankorikkoku/kihonkeikaku.html>) <2016年7月29日参照>
- ii 『日本経済新聞』「世界有数の観光大国になるために」(2016年4月30日)  
(<http://www.nikkei.com/article/DGXXKZO00281880Q6A430C1PE8000/>) <2016年7月29日参照>